

日本人による海外宣教の歩み

改訂版



Mission

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター 日本福音同盟

ローザンヌ宣教シリーズ

日本人による海外宣教の歩み

中村

敏

目次

推薦にかえて	入船尊
序	一
第一部・戦前戦中篇	
第一章 乗松雅休	三
参考文献	一〇
第二章 日本組合基督教会の朝鮮伝道	一一
― 渡瀬常吉の伝道を中心として ―	
参考文献	二二
第三章 日本基督教会の朝鮮・台湾伝道	二二
― 井上伊之助の台湾山地伝道を含む ―	
参考文献	二二
(一) 日本基督教会の朝鮮伝道	二二
(二) 日本基督教会の台湾伝道	二四
(三) 井上伊之助の台湾山地伝道	二六
参考文献	三二
第四章 南洋伝道団による南洋伝道	三三
(一) 南洋諸島と南洋伝道団の成立	三三
(二) 南洋伝道の実態	三四
(イ) ポナペ群島の伝道	三四
(ロ) トラック群島の伝道	三九
(三) 南洋伝道の評価と今日の状況	四二
参考文献	四三
第五章 東亜伝道会（満州伝道会）による中国伝道	四四
― 満州伝道を中心として ―	
(一) 東亜伝道会（満州伝道会）の成立	四四
(二) 熱河伝道	四六
(三) 山東伝道その他の東亜伝道会による伝道	五二
(四) 東亜伝道会に対する評価	五四
参考文献	五五
第六章 織田樗次（田永福）による朝鮮伝道	五六
参考文献	六四
第七章 純福音派の海外宣教	六五
(一) ホーリネス教会の海外宣教	六五
(イ) 在外邦人伝道	六六
(ロ) 外国人伝道	六八
(ハ) 外国人学生と派遣	六九
(ニ) 西田昌一の朝鮮伝道	七一
参考文献	七五
第八章 無教会と海外宣教	七六
(一) 内村鑑三と海外宣教	七六
(イ) 内村鑑三と世界伝道協会	七六
(ロ) 内村鑑三と朝鮮	七八
(二) 矢内原忠雄と海外宣教	八一
(イ) 矢内原忠雄と朝鮮	八一
(ロ) 矢内原忠雄と台湾	八四
参考文献	八六

第二部・戦後篇

第九章

日本基督教団による海外宣教

八七

(一) 日本基督教団の成立

八七

(二) 海外宣教の胎動

八八

(三) 海外宣教の実践

八九

(イ) 一九五〇年代

八九

(ロ) 一九六〇年代

九〇

(ハ) 一九七〇年代

九〇

(四) 教団の海外宣教の特色と課題

九三

参考文献

第十章 日本キリスト教海外医療協力会

九六

(一) JOCSSの成立

九七

(二) JOCSSの働き

九七

(イ) インドネシア

九八

(ロ) 台湾

九八

(ハ) ネパール

九九

(ニ) バングラデシュ

一〇一

参考文献

第十一章 福音派の海外宣教

一〇二

(一) 一九五〇年代(胎動期)

一〇三

(イ) 日本海外宣教会の成立

一〇四

(ロ) 日本クリスチャンカレッジ(JCCC)

一〇六

における海外宣教コースの影響

一〇八

(二) 一九六〇年代(形成期)

一〇八

(イ) インドネシア宣教協力会

一〇八

(ロ) アジア福音宣教会

一〇九

(ハ) 森本憲夫のタイ宣教

一一一

(ニ) イムマヌエル綜合伝道団の海外宣教

一一一

(ホ) 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の海外宣教

一二二

(三) 一九七〇〜一九八〇年代(発展期)

一二三

一、超教派

(イ) ウィクリフ聖書翻訳協会・日本委員会

一二四

(ロ) 南米宣教会

一二五

(ハ) 海外宣教交友会日本委員会(OMF)

一二六

(ニ) アンテオケ宣教会

一二八

(ホ) その他の超教派の宣教団体

一二九

二、教派による海外宣教

一二九

(イ) 日本同盟基督教団

一二〇

(ロ) 日本基督教改革派教会

一二一

(ハ) 日本ホーリネス教団

一二二

(四) 一九九〇年代の海外宣教の特色

一二三

参考文献

あとがき

一二四

資料

資料

一二六

推薦にかえて

入 船 尊

キリスト教会は、主御自身によつて生み出されましたし、そのヴィジョンも主から來たものでした。エルサレムから始まつて、もろもろの国民にというのがそれです（ルカ二四・四七）。このことのゆえに日本の教会も小さいながらも、主のヴィジョンに仕える教会としての歩みが続けることができたのです。

しかしながら海外宣教の歴史をまとめるということは、決して容易なことではありません。なぜならば、まだまとまつた資料があるわけではなく、多くは、隠されたわざを丹念に掘り起こすという以外にない根気の要る仕事だからです。日本の教会の海外宣教の働きがかなり表面に表われ、多くの人々の関心を呼ぶようになったのは、第二次世界大戦後のことでしょう。

「羊群」に連載されている時から読ませて頂く機会に恵まれていた者として、感じましたことは、著者の歴史を見る目の誠実さというものでした。埋もれているものをも根気よく追い求め、明るみに出し、全体としてこの働きが見通せるようになっていきます。一つ一つのわざや、そこに用いられた人物に注がれる目は温かい。そのことがこの種の書物にありがちな文章の固さから救い出し、読む者の心にとどく、血の通つた書物となっています。同時に歴史をつづるということは、批判、検討ということを抜きにしてはありえないことを著者は十分に承知されており、見るべきものを見据える視点を確保しておられます。そしてこれを書くことによつて、日本の教会の体質そのものをも見るという願いを明らかにして下さっています。この労多き作業に敬意を表し、心から推薦する次第です。

（前インドネシア派遣宣教師）

序

一八五九年のプロテスタントの日本宣教開始からまだ一三〇年しかたっていない今日、歴史としてまとめるに足りる、日本の教会による海外宣教の内実が、果たして存在するかと思われるかもしれない。しかし、日本最初の海外伝道者乗松雅休の渡鮮以来既に百年近く経た今日、日本プロテスタント教会の海外宣教は、教派、超教派によるとを問わず、大きく進展してきた。すなわち日本の教会は、宣教師を「受ける教会」から、「送り出す教会」へと成長しつつあるからである。そうした過程において、様々な課題や困難を抱え込んでいるのも事実である。そうした中でそろそろ今までの歩みを振り返り、評価を踏まえた上で、これからの海外宣教の展望を切り開いて行くべき時期にきているのではないだろうか。

筆者はこの学びを通じて、二つのことを期待している。一つは、たとえ小さな足跡であったとしても、過去の海外伝道の実態をできるだけ掘り起こし、その遺産や教訓を継承することによって、今日の海外宣教をより実りあるものとすることができる。

もう一つは、日本のプロテスタント教会の海外宣教への参与の仕方を吟味することにより、教会の体質が善かれ悪しかれ、浮き彫りにされてくるのではないかと、いうことである。特に戦前の海外宣教は、日本のアジアにおける植民地支配と切り離して考えることはできない。少数の例外を除いて、日本の教会による海外宣教は、日本による植民地支配に便乗し、結果的に利用された面が少なくなかった。戦後の日本は、軍事力ではなく、経済力においてアジア特に東南アジアに進出し、その影響力を強めている。そうした中で日本の教会から送り出されていった宣教師たちは、又送り出した教会は、どれだけ戦前の教会の体質を克服しているのであろうか。そういう点において、戦前の宣教の歴史を掘り起こす作業は無意味ではない。

筆者は宣教師でもなく、宣教団体のスタッフでもない。一地方教会に仕える一介の牧師であり、地方の神学校で教鞭をとっている者にすぎない。ここ二十年程の間に数回筆者が奉仕する新潟（旧柏崎）聖書学院で宣教史を教える機会が与えられ、学生たちと共に学んで

みた。本稿はその時の日本の部の講義ノートを土台としている。

この学びを続けることは、「全世界に出ていき、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」との主の大宣教命令への、筆者なりの応答である。取り扱うべき

範囲は広く、資料は限られており、力は乏しく、素描程度に過ぎないが、多くの方々の御叱正と御教えを頂ければ幸いである。

一九九二年二月二〇日